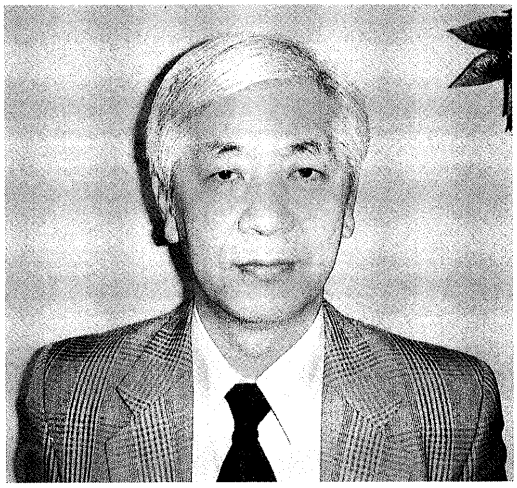
巻　頭　言

富山大学　ﾍﾞﾝﾁｬｰ･ﾋﾞｼﾞﾈｽ･ﾗﾎﾞﾗﾄﾘｰ長
池野　進



富山大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)が設立されて5年になる。初代VBL長を拝命して、2期5年になる。当初、1期2年の任期として、長くて4年と思っていたが、初代の1期目は3年だといわれて、結局5年に亘ってVBL長を務めた。その間，VBLを取り巻く環境が激変した。平成17年10月に旧富山大学，旧富山医科薬科大学、旧高岡短期大学が再編・統合して国立大学法人富山大学となった。これに合わせてVBLはそれまでの運営委員会を廃止し、地域共同研究センター運営委員会と統合した五福キャンパス産学連携推進会議を設置して運営の簡素化、効率化を図った。五福キャンパスにある13センターの中で組織的再編を図った唯一の例である。

本学は，3大学統合を期に地域連携分野推進のため地域連携推進機構を立ち上げて全学的活動を展開しようとしたが、各キャンパス、各センターの生まれと育ち，取り巻く環境の違いから緩やかな連携という形での機構設置となった。しかし，各センターの機構への対応に温度差があり、早急に調整が必要である。例えば、あるセンターは機構に人事、予算を含んだ委員会を設置し、機構長に最終意志決定を委ねているのに対し、大部分のセンターは機構の事業に参加はするが、センターそのものの運営はセンター独自の委員会で決議して実行している。

今、様々な事業を展開する場合に全学的視野が必要とされているのに、実行母体がうまく機能していないのではというジレンマに陥っている。VBLの一事業で例を挙げると、学生によるベンチャー・ビジネスプラン・コンテストがある。成績優秀な学生を表彰し、プラン実行の実証研究費を助成し、大学発の起業を促進するためのコンテストであるが、全学的に展開するためにも運営や予算の抜本的な見直しがそろそろ必要な時期になったと思う。

大学の内的な変動に対して、外的環境の変化はもっと激しい。平成16年4月に国立大学が法人化され各国立大学法人が，自主・自律性と自己責任の下に大学作りに取り組むことになり，それまでは2年に一度のVBL長会議が開かれていたが、開催されなくなり，情報交換の機会が少なくなった。

この荒波の中で生き残りをかけるVBLが見え始めている。富山大学のように地域共同研究センターと融合していく大学はかなり多い。産学連携部門の再構築である。

1，2の大学では、VBLそのものの見直しを始めているところもある。法人化以前は旧文部省の認可の基に明確な使命と業務を持って運営されていた各センターの存在意義をあら

ためて問い直しているのだ。もはや自分の業務はここまでといった狭い分担で日々を過ごすのではなく、大学に求められているのは何か、その中で何ができるかを考えた結果、現在の組織を組み直し、真に求められているセンターに生まれ変わるか、もしくは発展的に再編して組み込まれていくという道筋である。既存のセンター群は、新しい体制の中で生まれ変われるか、その存在意義が問われていくであろう。富山大学においても学長の大方針が示され、その中でセンター群の大編成変えは既定の路線となった。VBL は何を目指し、どう変わっていくのかが現在の最も多きな課題である。

この春をもって、VBL 長の重責から解放された。第 3 期科学技術基本計画に示されるように我が国は科学技術によって生き残ろうとしている。本来の VBL の使命はますます重みを増しているが、その実績を厳しく問われる時期にもさしかかっている。生まれと育ちが現状に合わなくなればVBLも形を変えて、富山大学版のVBLに生まれ変わる必要がある。数々の課題を残したまま新 VBL 長に後を引き継いで貰うのは申し訳ない限りであるが、折角ここまで来た VBL なので、ますます隆盛になるよう今後の発展を祈っている。